



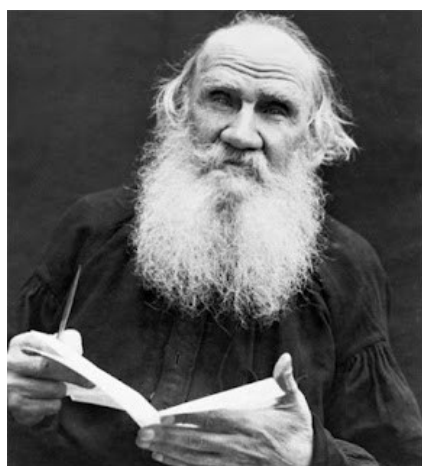
館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 2 月 28 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

人にはどれほどの土地がいるか



1886 年、レフ・ニコラエヴィチ・トルストイの短編小説。

土地があれば人間幸せになれると考え、頑張っただけで、多くの土地を手に入れたパホームという農民のお話です。

『物語の主人公はパホームという農民です。彼は、「たくさんの土地を持っていれば、悪魔などを恐れるに足らず!」と考えておりました。しかし彼は気づいてはいませんでした。この話を悪魔はちゃんと聞いていたのです。その後パホームは、それなりに多くの土地を所有するようになりましたが、隣人たちとの争いも増えてきました。「おまえの屋敷を焼き払ってやる!!」と脅された彼は別の村のもっと広い土地に移り住むことになりました。ここで彼は、さらに多くの作物を育て、わずかながら財産を蓄えることもできましたが、借地で作物を育てなければならない状況に満足できず、バシキール人に紹介された広大な土地を所有しようと、パホームは彼らのところに行き、できるだけ多くの土地をできるだけ低価格で譲り受けようとしていました。ところがバシキール人の申し出はとて変わっていました。「1000 ルーブルの代金で夜明けから歩き始めて、途中、鋤で印を付けながら、好きなだけ広いエリアを歩き回り、その日の日没までに出発地に戻ってこられたら、囲った土地はすべてあなたの物になりますが、出発点まで戻ってこられなければ、代金を失い、土地を受け取ることもできません。」彼は生涯に一度のチャンス到来とばかりに喜びましたが、その夜、パホームが見た夢は、笑っている悪魔の足元で自分が死んで横たわっているという不気味なものでした。

さて当日、パホームは、できるだけ遠くまで歩き続け、太陽が沈む直前まで土地に印をつけていきました。日没近くになって彼はようやく、自分が出発点からはるか遠くまで来てしまったことに気づき、慌

てて待っているバシキール人のところまで、一目散に走って戻って行きました。ちょうど太陽が沈む頃、彼はついに出発点に戻ることができました。バシキール人は彼の幸運を称えますが、走りに走って、疲れ果てたパホームはその場に倒れ、息絶えてしまいます。結局最後に彼が手に入れた土地は、たった6フィートの、彼のお墓だけでした。』

このお話を書いたトルストイは、帝政ロシアの小説家であり思想家です。代表作に「戦争と平和」「アンナ・カレーニナ」「復活」など、文学のみならず、政治・社会にも大きな影響を与え、非暴力主義者としても知られています。トルストイが書いた、この「人にはどれほどの土地がいるか」という物語は、結果的には人間の欲望とその結果についての深い洞察を私たちに提供してくれますが、同じようなテーマや教訓を持つ作品は、他にも多く存在します。

例えば「欲望という名の電車」テネシー・ウィリアムズによる戯曲で、人間の欲望とその破壊的な力について探求しています。他にも「マクベス」シェイクスピアの戯曲で、権力への野心がどのように破壊をもたらすかを描いています。さらに「グレート・ギャツビー」F. スコット・フィッツジェラルドの小説で、アメリカン・ドリームと欲望が悲劇的な結果をもたらす様子を描いています。さらには「蠅の王」ウィリアム・ゴールディングの小説で、人間の本性と欲望が文明を壊す様子を描いています。「カラマゾフの兄弟」フョードル・ドストエフスキーの小説で、人間の欲望や罪、救いについて深く掘り下げています。

どの作品も「人にはどれほどの土地がいるか」と同様に、欲望の影響やその結果について考えさせられるものです。人間の欲望が、個人的範疇を超え、権力と結びついて、取り返しのつかない悲劇を招くという構図は、探せば世界中に幾らでも存在するテーマなのです。有史以前から、この点において人間はいささかも進歩することなく現在に至るわけでも、どんなに科学が進歩しても、根底にある思想が貧しければ、世界に平和は訪れない。

